

ビル・エバンスの愛想曲集やバド・パウエル、ホレス・シルバーの作品集など、ジャズ・ピアノの巨人をテーマにしたアルバムで人気を博しているニューヨークのジャズ・ピアニスト、デヴィッド・ヘイゼルトイン。『アルフィー』と題されたこのニュー・アルバムは、作曲家バード・バカラックの作品集だ。ジャズ・ピアノの巨人にちなんだ名曲の解釈と演奏で新たなジャズ・リスナーを開拓したバーサタイルなストレートアヘッド・ジャズ・ピアニストの新境地といえる作品の登場である。

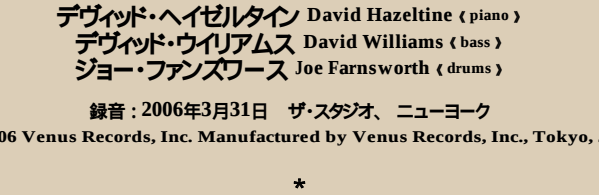
バード・バカラックは1960年代のポピュラー・ミュージックのシンボリックな存在、そしてスタンダード・ソングの名作曲家。60年代はオリジナル曲を歌うロックが、ポピュラー・ミュージックの中心になった時代。フォーク/シンガー・ソングライターも台頭した。バカラックのような“専業”作曲家は少なくなった。シンガー・ソングライターやロック・ミュージシャンは、自分が歌う曲を作曲する。バカラックはシンガーが歌う曲を作曲する。その意味では、バカラックは今のところスタンダード・ソングの最後の作曲家といえるかもしれない。

しかし、バカラックは最初からコール・ポーターやジョージ・ガーシュインのようにジャズ・ミュージシャンに人気があったわけではなかった。ジャズ・ミュージシャンが取り上げるスタンダード・ソングの大半は、1950年代までのミュージカルが映画から生まれている。いわゆる、ティンパンアレイの作曲家であり、曲である。ティンパンアレイはジャズ・アレンジに合っていた。バカラックはジャズから影響を受けたものの、彼の作った曲はポップスやソウル・シンガー用に書かれたものであり、リズムや音使いもユニークで斬新だった。60年代に入ると時代は大きく変わった。当然、音楽も変わった。バカラックの曲は新しい時代の音楽ファンに受け入れられたのだ。バカラックの曲をほぼリアルタイムでカバーしたジャズ・ミュージシャンもいた。ただ、数は決して多くなかった。こうした傾向は、バカラックだけではなく、ビートルズにもいえる。さらに、もう一つ理由が考えられる。60年代のジャズはオリジナル曲志向が強まった。ティンパンアレイをジャズ化するするのは、新しい時代の空気に合わなかったのだろう。バカラックは作詞家のハル・デヴィッドと長年にわたりコンビを組んで活躍した。バカラック~デヴィッドは、ポピュラー音楽史上に輝かしい足跡を残した名チームなのである。

そんな時代を経て、バカラックの曲のようなスタンダード・ソングにジャズのスポットが当たるようになったのは、1980年代に入って正統的なジャズが再び人気を取り戻してからだと思う。バカラック・ナンバーをジャズ・アルバムでよく見かけerようになった。そして、昨今では、このデヴィッド・ヘイゼルトインのバカラック作品集が物語るようにように自然に受け入れるようになっている。バカラック世代あるいはそれ以後の世代がジャズ・リスナーになっているわけだし、バカラックやロックを聴いて育った世代にとっては、バカラックのジャズ・バージョンは何の違和感もないだろう。それでも、作品集という全面的なスポットの当たり方は、まだジャズでは珍しく、フレッシュな印象を与えるのは事実だ。

デヴィッド・ヘイゼルトインは1958年10月27日、ウィスコンシン州ミルウォーキー生まれ。バカラック・ナンバーにリアルタイムで子供の頃から親しんだ世代だ。ヘイゼルトインは13歳でプロフェッショナルな活動を始め、シカゴやミネアポリスに行ったり、ミルウォーキー・ジャズ・ギャラ

Alfie アルフィー David Hazeltine Trio デヴィッド・ヘイゼルトイン・トリオ 1. イン・ビトウィーン・ザ・ハートエイクス In Between The Heartaches (4:29) 2. 雨にぬれても Raindrops Falling On My Head (5:12) 3. 恋の面影 The Look Of Love (5:22) 4. ウォーク・オン・バイ Walk On By (3:59) 5. ア・ハウス・イズ・ノット・ア・ホーム A House Is Not A Home (6:34) 6. ジス・ガイズ・イン・ラブ・ウィズ・ユー This Guy's In Love With You (7:47) 7. 世界は愛を求めている What The World Needs Now Is Love (6:22) 8. アルフィー Alfie (5:40) 9. 小さな願い I Say A Little Prayer (6:07) 10. 遙かなる影 Close To You (6:04) All Songs : Burt Bacharach
デヴィッド・ヘイゼルトイン David Hazeltine (piano) デヴィッド・ウィリアムス David Williams (bass) ジョー・ファンスワース Joe Farnsworth (drums) 録音：2006年3月31日　　ザ・スタジオ、ニューヨーク ⒸⒹ 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan. ★ Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan Recorded at The Studio in New York on March 31, 2006 Engineered by Katheline Miller Mixed and Mastered by Venus 24bit hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara　Photos：Mary Jane Designed by Taz



リーのハウス・ピアニストとして活躍したり、ローカルエリアで長年活動した。ニューヨークへ進出したのは92年だったから、マイベースで活動してきた運咲きの逸材といえる。ニューヨーク進出後、彼は自己のピアノ・トリオ、マリーナ・ショウの音楽ディレクター、カーネギーホール・ジャズ・バンドなど多彩な活躍をしている。ヴィーナスレコードの諸作で知られるエリック・アレキサンダーらとのグループ、ワン・フォー・オール

のメンバーでもある。アルバム『アルフィー』は、デヴィッド・ヘイゼルトインのヴィーナスレコード第6弾である。共演者のベースのデヴィッド・ウィリアムスとドラムのジョー・ファンスワースは、ヘイゼルトインの共演仲間であり、ワン・フォー・オール

のメンバーでもある。気心の通じ合ったミュージシャンたちだ。ウィリアムスは1970年代の初め頃からニューヨークで活躍。ジョー・ファンスワースはマサチューセッツ州出身で、大学卒業後にニューヨークへ進出。エリック・アレキサンダーの朋友でもある。ヘイゼルトインは、バカラック・ナンバーに多彩なアレンジを加えながら、ストレートアヘッド・ジャズの魅力にあふれる演奏を聴かせている。心地よいスイング感、メロディーの味わい、ジャズのダイゴ味を伝えるアドリブ、一体感のあるトリオ・サウンドなど、バカラック・メロディーの素晴らしさとともにジャズ・ピアノ・トリオの持つ魅力を十分に味わわせてくれるアルバムである。

すべて作曲はバート・バカラック、作詞はハル・デヴィット。イン・ビトウィーン・ザ・ハートエイクス

1966年発表。ディオンヌ・ワーウィック、アニタ・カー・シンガーズなどが歌った。ヘイゼルトインはボサノバ・タッチにアレンジ、スインギーなピアノを聴かせる。

雨にぬれても
ポール・ニューマン、ロバート・レッドフォード主演の映画『明日に向かって撃て！』(1969年)の主題歌。B.J.トーマスの歌が70年に全米チャート第1位を獲得。アカデミー主題歌賞を受賞したバカラック最大のヒットのひとつだ。原曲のメロディーをはさみながら展開するヘイゼルトインのアドリブが聴きもの。恋の面影

映画『007／カジノ・ロワイヤル』(1967年)の挿入歌として作曲。オリジナルのダスティ・スプリングフィールド、セルジオ・メンデス&ブラジル66などがヒットさせた。ジャズ・バージョンの多い人気曲だ。ヘイゼルトインのメロディーの弾き方、歌心あふれるアドリブに惹き付けられる。

ウォーク・オン・バイ
ディオンヌ・ワーウィックが1964年に大ヒットさせた。意外とジャズ・バージョンがある曲だ。ここではベースのデヴィッド・ウィリアムスがメロディーを弾き、彼のアドリブがフィーチャーされる。ア・ハウス・イズ・ノット・ア・ホーム
1964年の映画『禁じられた家』(A House Is Not a Home)の主題歌。有名ジャズ・ミュージシャンが多くの録音を残している。ピアノ・トリオが快適に乗り、ドラムのジョー・ファンスワースのソロが登場。ベースのウォーキングからも乗りのよさが伝わる。ジス・ガイズ・イン・ラブ・ウィズ・ユー
トランペット奏者ハーブ・アルバートが歌って大ヒット、1968年に全米チャート第1位を獲得。また、翌年、ディオンヌ・ワーウィックが「Guy」を「Girl」に替えて歌った「This Girl's In Love With You」も大ヒットした。ヘイゼルトインの歌心にとむアドリブが素晴らしい。ファンキーな演奏をチラチラみせるのもいい。世界は愛を求めている

1965年にジャッキー・デシャノンがヒットさせた。これもジャズ・バージョンの多い曲だ。ここでもヘイゼルトインのアドリブはクオリティが高い。アルフィー

イギリス映画『アルフィー』(1966年)の主題歌。テナー・サックスのジャズ・ジャイアント、ソニー・ロリンズが音楽を手がけた映画としてもジャズ・ファンには有名である。テーマ・メロディーを展開させていくようなアドリブが聴きもの。

小さな願い
ディオンヌ・ワーウィックの歌で1967年に大ヒット、続いて翌年、アレサ・フランクリンもヒットさせた。この曲も人気スタンダード・ナンバーになった。遥かなる影
カーペンターズの歌が、1970年に全米チャート第1位に輝いたスロー・ナンバー。ヘイゼルトインは原曲のムードをガラリと変えて、スインギーに展開。自由な広がりと発展を感じさせる演奏だ。

(高井信成)